

葬儀産業研究の可能性

—社会的傾向としての「死ぬこと」の把握を目指して—

田中大介

I 序

本稿では、儀礼研究の立場から死を扱ってきたことの多かった「人類学」、主に医療・臨床・心理という側面に照射して領域横断的な知見から死を見据えてきた「デス・スタディーズ」、そして筆者が現在携わっている「葬儀産業研究」という三つの領域を系譜論的に俯瞰して、死にまつわる現在の諸研究を構成する状況を概述するとともに、最後に挙げた葬儀産業研究が、従来の死という問題への取り組みに対してどのような位置にあるかを提示する。この作業の目的は、生物学的死という普遍性と、個人的な死に様の多様性との間に存在する「死の社会的傾向」を捕捉するにおいて、葬儀産業という対象が有効な射程を提供し得るという可能性を示すことにある。

ところで産業化した諸地域においては、その多くで葬送儀礼を請け負う職能集団である葬儀産業が存在しており、また病院で死ぬこと以上に「死んだら葬儀屋さん」という実践が十分に一般化しているものの、死に関連する従来の研究で葬儀産業という対象が半ば看過されている点は否めず、一つの蓄積された知見となるには至ってはいない。一方で、先述したデス・スタディーズのように、現在では死に近く局面に際しての医療・臨床・心理という要件に照射するという手法が、死にまつわる研究において太宗を占めている状況にある。

この潮流は不当なものではない。死に近く局面そのものに接近しようとする努力は、後述するように1960年代後半には既に大きな流れとなっていたと考えられるが、それはまた人々の需要に積極的に応えることを目指した挑戦でもあったからである。むしろ問題は、「死ぬこと」そのものは臨床的实践のみで形成されているわけではないという点にある。即ち、死に対処する人

間の諸実践や観念は、医療施設や終末期といった、死の局面に近い時空のみで形作られるものではなく、その裏側には臨床空間からさらに広がる社会的背景が存在するのだ。このような前提を踏まえて本稿では、葬儀産業への着目が死にまつわる社会的動因を捕捉するための一つの可能性になり得るといふ視座の提示を試みるとともに、医療・臨床・心理という柱を基礎にした研究と、葬儀産業研究のように医療や臨床の場からさらに広がる死の社会性を考究する研究とは、決して分断されているのではなく相互補完的であることを主張していきたい。

II 人類学—死者儀礼と民族誌

第II章から第IV章までは、冒頭に述べた三つの領域をそれぞれ概観し、その潮流の特質を抽出する。先ず本章では人類学において死がどのように扱われてきたかという点を示すこととしたい。

人類学の萌芽期における死という題材を系譜論的に見た場合、それはほとんど人類学という学問が形作られてきた歴史と重なる。この点についてPalgiとAbramovitchは、死を扱った学説における古典的アプローチとしてTylor及びFrazerによる進化主義的分析、Durkheim、Hertz、Van Gennepらによるフランス社会学派の潮流、そしてMalinowski、Radcliffe-Brownの機能主義を挙げているが [Palgi and Abramovitch 1984:387]、これはまさしく人類学の古典時代の学説史そのものに他ならない。同時にこうした先達の時代においては、死という出来事が社会の中でいかに扱われているかという点についての理論が様々に枝分かれしていく一方、観察対象そのものは死者儀礼に偏っていくという推移を見せる。つまり、死者儀礼とは死を契機とした心理や社会関係が凝縮された「死の近似値」であるという前提のもとに、死を研究することは死者儀礼を研究することであるという流れがこの古典的アプローチの時点で既に確立したと言えよう。

機能主義人類学の誕生以降、人類学における死はフィールドワークによって観察され、その結実である民族誌=エスノグラフィへと反映させられる形で扱われることとなる。こうして機能主義以降の「死の人類学」は、儀礼研究と民族誌という大きな流れに乗って展開していく。この流れがもたらした一つの成果として、1980年代におけるBlochとParryの編集による*Death*

and the regeneration of life [Bloch and Parry(eds.) 1982] を挙げることができるだろう。ここではそこに収録された全ての題材について扱うわけにはいかないで、編者の一人であるBlochの*Ritual, history, and power* [Bloch 1989] における儀礼の観察方法に焦点を当ててみたい。Blochの基本的な関心は、儀礼における「イデオロギーの構築」の解明に向けられていた。Blochはマダガスカルメリナ社会における観察を通して、そこで行われる儀礼を歴史的因果関係の帰結として位置付けるとともに、暴力・権力・社会階層という要件を足がかりにして、儀礼を「イメージとイデオロギーの生成装置」とであると論じている [Bloch 1989:128-129]。こうした分析手法は、あらゆる儀礼における普遍的要素を見出そうとする試みであり [Bloch 1989:187]、当時の相対主義的な潮流に抗する挑戦でもあった。

それに対してMetcalfとHuntingtonは*Celebrations of death* [Metcalf and Huntington 1991]において、儀礼実践の複雑性をより重要視して、普遍性という概念を極力排除しようという主張を展開した。彼らは死を取り巻く「社会的諸動因」、「個人の情緒と行動」、「儀礼実践」という様々な次元が織り成す結果の不確定性に焦点を当て [Metcalf and Huntington 1991:6]、死という出来事が発生させる人間の情緒と行動は、決してランダムな反応であるとは言えないが、局地的な文化の産物として無数の組合せを有すると考えた [Metcalf and Huntington 1991:24]。従って彼らにとっては、死者儀礼の研究が「人は皆死ぬ」こと以外の普遍性を持つという結論に達するということはあり得ないことであり、また死者儀礼の研究とは、死の普遍性を追究するものではなく、あくまで人々の局地的な価値観や行動を浮き彫りにするものであると捉えられた [Metcalf and Huntington 1991:25]。

こうして機能主義の誕生からほぼ半世紀を経た1980年代には、人類学という領域において死をめぐる議論は混沌の中にあった。その混沌とは即ち「死を把握すること」と「死者儀礼を研究すること」とは果たして合致しているのか、という点への疑問から生じたものでもあったと言えよう。その一方で、「死の人類学」において死者儀礼研究と並ぶもう一つの拠り所であった「民族誌をつくる」という作業は脈々と継続されていた。従って機能主義の誕生から1980年代にかけての時代とは、死者儀礼の位置付けに関する理論の錯綜を生ずる一方で、それらの議論を回避しつつ、民族誌をつくるという目的の中で死者儀礼を観察する作業が淡々と進められた時代でもあった。留意すべ

きは、これらの民族誌は、単に表面的な写実性を追求したものではなかったという点である。これに関して、内堀基光と山下晋司は以下のように述べている。

(前略) 我々の死の人類学あるいは死の民族誌は、この経験（時の極小の単位において生起する自己の死）の外にある出来事についてほとんど何事をも語ることはできない。我々が語りうるのは厳密に言えば他者の死のみであり、せいぜいのところ他者の死に投影された自己の来たるべき死の予期が特定文化においてどのような現象形態をとるかということに過ぎない。このことは死の人類学の現在における限界であるが、しかし一面では我々がここで扱いうることが「死」と呼ばれるものの実相でもあるのだ。

[内堀・山下1986:17-18]

このように述べた後で彼らは「死」と「死ぬこと」との分離という考察を展開し、「死」とは生の意味領域であるとともに、最初から意味を剝奪された「死ぬこと」を規定していると述べる [内堀・山下1986:19]。即ちここで述べられている死の民族誌とは、生物学的現象としての「死ぬこと」の重要性を認識しつつも、むしろ死が人間集団の中でどのように意味付けされ、表象されているかという点に力点を置くものであった。そして、人が死ぬれば死者儀礼をするという現象があらゆる地域において存在しているという状況こそが、「死の人類学」の作業として、死の民族誌と死者儀礼研究とがともに存立する最も強力な理由であったのである。

しかし、こうした死者儀礼や民族誌という範疇で死を捉えようとする営為は人類学において継続されてはいるものの²⁾、死を主題に構えた場合に死者儀礼そのものを研究対象に据えることは、現在では限りなく古臭い印象を与えるようになってしまっている。その背景としては、産業化の流れの中で既に儀礼そのものが社会における重要性を失ってしまっているのではないかという疑義が広がったこと、「儀礼には云々が反映されている」という解釈論的手法を保証する理論が脆弱であったこと、そして医療というカテゴリーが他領域と同様に人類学の中でも大きな位置を占めるようになり、「医療への眼差し」が儀礼研究を圧倒したという状況を挙げることができるだろう。

III デス・スタディーズ—「死への対処」という視座

一方、これらの人類学における動向とは半ば分断された形で、臨床心理学、精神医学、そして社会学といった領域が互いに結び付いた死への取り組みが、現在までに拡大を見せている。時にこうした研究はさらに細分化されて様々な語彙で称されるが、それらを包括するものとしてここでは「デス・スタディーズ」という言葉を採択することにしよう。この新しいデス・スタディーズという潮流は、そのほとんどが「死に逝く者」の心理に着目し、その様態を明らかにしようとする。同時にこの方向性は、「死ぬ時の気持を知りたい・死ぬ時に備えたい」という人々の需要に応えるものでもあった。

こうした「死の心理」の類別という手法を採った先駆的研究としては、石川弘義が述べるように、1890年代末における心理学者Hallの「死の恐怖」研究、Scotによる老いのプロセスと死の心理の考察、1930年代における社会学者Eliotが行った死別体験の家族関係への影響の調査、そして精神科医Lindemannによる「死の悲嘆」の研究などを挙げることが可能であろう [石川1990:29-63]。現在の我々が知るように、こうした心理的側面への注目は現在でもデス・スタディーズの基幹である。しかしそれは単に先達が形作った研究の資産が大きかったためだけではない。

この点で、まさにデス・スタディーズが爾後の質量を拡大していくための立場表明であったのが、1958年に発表されたFaunceとFultonの論文“The sociology of death : a neglected area of research” [Faunce and Fulton 1958]である。「死の社会学」の標題を冠した嚆矢とでも言うべきこの論文では、死の局面における心理の把握という手法がさらに強化されるべきであることが唱えられた。同時に彼らは、前述したDurkheim、Rivers、Tylor、Malinowskiのような儀礼研究の先達が非西洋の無文字社会しか扱ってこなかったことを批判し [Faunce and Fulton 1958:205]、医療実践に接近すること、そして死が持つ意味そのものを理論的に整備することの必要を主張した [Faunce and Fulton 1958:206-207]。こうした唱道も影響して、その後のデス・スタディーズは心理学的な要素を多分に有するという方向性に動いていくこととなる。さらに、こうした方向性に具体的な筋道を付けたのが、心理学者Feifelの編著による*The meaning of death* [Feifel(ed.) 1959]、そして同書の所収論文の中で最も注目を浴びた臨床心理学者Kastenbaumによる論文

“Time and death in adolescence” [Kastenbaum 1959] であった。KastenbaumはAisenbergとの共著で後に *The psychology of death* [Kastenbaum and Aizenberg 1976]を上梓するが、の中で彼らは「死の観念」を常に相対的で変化するものと見なしつつも、「刺激／反応」モデルを援用して「刺激＝死、反応＝恐怖」という枠組みを設定する。こうした枠組みを基礎にして、彼らは「死を人のイメージに置き換える」という「擬人化」の手法を用いて、質問票調査により死のイメージを測定したが、そこには「若者的」や「老人的」といった数種の分類を見出すことができたとしている。こうした心理分類による死のイメージの測定という点は、現在のデス・スタディーズに引き継がれている手法の典型例でもあるが、こうして「心理への注目」への傾斜が時代を経て顕著になっていくことが、ここからも窺えるだろう。

些か時間軸が前後したが、この後に続く1960年代という時期は、それまでの蓄積と相まってデス・スタディーズが大きな社会的影響をもたらした時代であった。その震源地の代表格が、Kübler-Rossの *On death and dying* [Kübler-Ross 1969]である。Kübler-Rossは200人を超える末期患者にインタビューを試み、死に逝く人々の心理に着目してその分類を試みたが、それを取り巻く議論の収束点は「いかに安寧に死を受容するか」という点にあった。即ち、それまでの研究が「どこかで起きている誰かの死」の情報供給であったのに対し、ここでは「死の不安」そのものの解消が眼目として設定されたことで、医療・終末期・死の心理という問題設定が大きな影響力を持って迎えられたのである。こうした取り組みに加えて、ミネソタ大学における「デス・エデュケーションと死の研究センターCenter for Death Education and Researc³⁾」の設立に代表されるように、社会学、心理学あるいは社会心理学、そして精神医学の領域に携わる研究者達が死という領域に取り組む態勢が、教育と研究の双方においてできあがっていった1960年代という期間は、まさに死の研究における一つの転換点となった。そしてまた、この時期を彩る特質として挙げられるのは、死に逝く過程にどう対処するかという「応用」への視座が従来以上に明確にされたという点、そしてその帰結として医療・臨床への注目が強化されたという点である。こうして少なくとも米国においては、これらの射程の外にある社会的空間から死を捉えるという手法はどちらかというところすほみになる一方で、医療施設で行われている実践と、それを

裏付ける組織内制度の観察という題材を社会学及び近接領域に提供することとなった。この代表例がGlaserとStraussによる*Awareness of Dying* [Glaser and Strauss 1965]、そしてSudnowの*Passing On* [Sudnow 1967]という、ともに病院でのフィールドワークを基礎とした研究である。これら二つの研究はともに病院において、いかに「死に逝く過程」に対処しているのかという点を、現場の医療従事者の実践をもとに描き出すという手法を採用した。そしてまた、これらの動きは、Sudnowが皮肉として「死の民族誌がどこにも見当たらない」[Sudnow 1967:3]と述べたように、死者儀礼一辺倒の民族誌に対するアンチテーゼでもあった。こうした背景には、1960年代の英国に始まるホスピス運動の普及、そしてそれらと相前後して大きな潮流となっていく緩和ケアやターミナルケアの隆盛があり、それらが一体となってデス・スタディーズを喚起していったという点をここでは見逃してはならないだろう。

これらのセンセーショナルな潮流を受け継いで、1970年代以降もデス・スタディーズは活発な動きを見せる。1970年代に*Omega*や*Death Studies*⁴⁾といった死の研究に特化したジャーナル類が刊行され始めたのもその証左と言えるが、一方で「死の心理」を再考させるような、従来とは一味違った研究が生産されていることにも留意したい。例えばLiftonは原爆投下という極限状態に晒された広島の人々を追跡調査した*Death in life* [Lifton 1971]、そしてその後の*The life of the self* [Lifton 1976]や*The broken connection* [Lifton 1979]といった著作において、「生の永続性のイメージ」に対置される「死の視野」を持つことで新たな心理状態が形成され、力強く生きようとする動きが呼び起こされることを主張した。この考え方はまた、個人の心理的経験と、集団の文化として共有された経験とが密接に関連することを示すものであったが、「死の心理学」の領域と「死の社会学」の領域が強固に結び付いたのは、まさにこの「個人と集団の心理的経験」という点であったとも言えるだろう⁵⁾。

だが、このような分岐を産み出しつつも、「死への対処」という応用志向を基礎におく点は、デス・スタディーズの基本姿勢として現在まで堅持されていると言える。そして、この点への積極性が最も色濃く顕現されているのが、デス・エデュケーションという分野である。このエデュケーション—教育—という言葉の背後に、我々は1960年代の「死の認知運動the death

awareness movement」即ち、死についてより深く考え、より多くを知ろうという啓蒙のエートスを汲み取ることもできるだろう。ところで教育や啓蒙が不特定多数の人間に向けられる際の常として、それらは直截的な指南書といった体裁を採ることが多い。この例としては、ハウ・トゥをそのまま標題としたDrazninの*How to prepare for death: a practical guide* [Draznin 1976]を人口に膾炙した一般書として挙げるができる。学術研究の範疇でデス・エデュケーションを謳うものは、こうしたあからさまな指南書的な内容ではないものがほとんどだが、「対処」ということを基軸に据えている点では並列できよう。

かなり限定的になったが⁶⁾、こうして現在のデス・スタディーズは「医療」・「臨床」・「死に逝く過程」・「死に直面する心理」という要件を主軸として、死の局面に対処するための知見を形作ろうとする応用志向的な研究が主体となっている印象が強い。しかし一方で、こうした要件からさらに広がる様々な社会的空間に着目した研究が、特に社会学の領域において1980年代から現在に至るまで一定の結実を産み出していることにも注目して良い。代表的な例だけ拾うならば、Charmazの*The Social Reality of Death* [Charmaz 1980]、Kearlによる*Endings: A sociology of death and dying* [Kearl 1989]、Clarkの編による*The sociology of death: theory, culture, practice* [Clark(ed.) 1993]、HowarthとJuppの編著である*Contemporary issues in the sociology of death, dying and disposal* [Howarth and Jupp(eds.) 1996]、そしてSealeの*Constructing death* [Seale 1998]などが挙げられるが、こうした研究が臨床空間から一歩外に出た「死の社会性」にどこまで肉薄できるかという点については、未だ今後の推移を見守る必要があるだろう。

IV 葬儀産業研究—臨床空間から広がる社会性への注目

それでは臨床空間からさらに広がる射程を有した研究は過去に無かったのか。勿論そうではない。むしろ第II章で述べた死者儀礼研究が、そうした研究であったとも言える。しかし既に我々が見てきたように、デス・スタディーズの隆盛はある意味で「死に際してほとんどの人間は儀礼を行う」という経験則を無条件で担保にするような死者儀礼研究の姿勢への疑義表明でもあった。こうした難点を克服するために、産業的实践という現代的特質に目配

りをした領域の一つとして、葬儀社従業員や検死官といった職業に照射した、いわゆる「死の仕事deathwork」研究という分野が存在する。その中でも、従来の死者儀礼研究で蓄積された知見を採りこみつつも、儀礼が行われる社会的背景を等閑視しないという視座を持つものとして、ここでは筆者の研究でもある「葬儀産業研究」というカテゴリーを提示したい。この研究は端的に言えば、葬儀実践が商行為になっているという点に特質を見出したものであるが、そこでは供給者としての葬儀産業のみならず、葬儀を依頼する消費者、そしてそのやり取りが織り成す社会的傾向といった多角的側面から「死の社会的傾向」に迫ろうとするものである。いずれにしても葬儀産業研究とは何々学とは異なる一つのサブカテゴリーであって、その点でこれまで述べてきた領域とは括られる規模を異にするものではあるが、細々とは言えその系譜は時代毎の「死の研究」の変化を反映している。

実際のところ、この研究は葬儀のために消費者が不当に高価なコストを支払っているという問題意識から出発しており、つまり消費者運動的な要素を有した葬儀産業批判がその源流にあった。我々はその嚆矢を米国におけるGebhartの*Funeral Costs: What they average. Are they too high? Can they be reduced?* [Gebhart 1928] や、英国のWilsonとLevyによる*Burial reform and funeral costs* [Wilson and Levy 1938] といった1920～30年代に遡ることができるが、こうした批判的な要素はその後Bowmanの*The American funeral: a study in guilt, extravagance and sublimity* [Bowman 1959] という、米国葬儀産業への批判をあからさまにタイトルとした著作によって引き継がれている。一方で、こうした社会的不合理への批判という要素を離れた業績としてKephartの論文“Status after death” [Kephart 1950]がある。だがこの論文は「社会的階級の反映としての行動様式の差異」という前提を、葬儀実践に当てはめた試みであったものの [Kephart 1950:635]、裕福な者は立派な葬式が「できる」という可能性の範疇を超えるような、特段の理論的伸長を促したものではなかった。

しかしこれら一連の研究は、人々の間に沸き起こっていた齟齬感を具現化したものでもあった。つまり、「死を考えよう」という問題意識の高まりに根ざしていたという点で、前述したデス・スタディーズの系譜と共通する要素が色濃く存在するのである。この点をより明確にしたのが、米国における葬儀の現代的実践を描いたMitfordの*The American way of death* [Mitford

1963]であった。この文献は、前章に挙げたKübler-Rossの*On death and dying*と同じか、それを上回るほどのセンセーションを巻き起こしたものであり、その意味でこの2つの著作は互いに違う対象を扱いつつも、双方相まって広く社会に「死を考える」ことを促した。ここで注目すべきは、「我々は自ら知らない内に、伝統的と称される流儀を行っている」というMitfordの内省的視点であろう。彼女の狙いは、エンバーミング＝遺体加工や、過剰に装飾された棺、そして効率主義といった、葬儀産業に付帯する数々の断片を観察することで、死者儀礼という場からより視点を広げて、死に方と生き方の双方を見直そうとすることにあつた。ここに我々は、1960年代における「死の認知運動」の高まりの中に、*The American way of death*に代表される葬儀産業研究が含まれているという様相を見て取ることができる。つまりそれは、デス・スタディーズがそうであったように、内実を把握することで社会的需要に応えようとする潮流であり、そして葬儀産業研究の場合は批判型消費者運動としての性質を強く持つことでデス・スタディーズとの共同戦線を張っていたのであつた。

こうした「現場の内実へ」という流れは、産業化という現代的特質を念頭において自らの死に様を捉えようとする動きでもあつた。この動きに沿って以後も葬儀産業に着目した一般書は続々と刊行されたが、学術研究自体は葬儀産業「批判」への反動として、精緻な分析という目的に一旦落ち着くこととなる。この役割を担ったのは主に社会学の領域であり、その1970年代の代表例としてはPineの*Caretaker of the dead* [Pine 1975]が挙げられる。この著作で注目されたのはフューネラル・ディレクターの役割であり、その実践を中心として、葬儀を取り巻くインフォーマルな人間関係が、現代における死の扱われ方において大きな要因となっていることが示されている。さらにTurnerとEdgleyの論文“Death as Theater: a dramaturgical analysis of the American funeral” [Turner and Edgley 1976]では、葬儀を演劇に見立てた社会学のドラマツルギー分析が試みられ、各局面での表現行為が人間関係を大きく規定するという論旨が展開された [Turner and Edgley 1976:389]。

近年では、こうした葬儀社の仕事の実際を、長期フィールドワークによって把握しようとしたいくつかの結実が産み出されている。その例としては英国における葬儀産業の現代的特質を描き出したHowarthの*Last rites: the work of the modern funeral director* [Howarth 1996]、そして北九州の葬儀

社での調査から現代日本の葬儀の消費現象化を浮き彫りにしたSuzukiの*The price of death: the funeral industry in contemporary Japan* [Suzuki 2000]などが挙げられるだろう。こうした研究から我々が垣間見ることができるのは、Suzukiが「McFunerals=マクドナルド化した葬儀」と呼んだような [Suzuki 2003]、能力や知識が著しく葬儀産業に収束された状況下で日々行われている現代的な葬儀や、またそうした状況への反発とのせめぎ合いから生成されていく「死への態度」の構築である。興味深いのは、このように葬儀産業の実践から死にまつわる現代の特質を焙り出すという手法は、どちらかと言えば米国においてよりも、近年の英国そして日本において、同時生起的な動きとして発生しつつあるという点である。特に日本においては、葬儀社が地域に浸透していく様相を精緻に追った山田慎也の研究 [山田 1999]、葬祭業の成立とその変遷から「死への態度」の変容を追究した村上興匡の分析 [村上 1997]、そして新しい葬儀実践とその社会的背景に注目した中筋（松本）由紀子の考察 [松本 1996]などに代表されるように、領域横断的な視座によって「葬儀産業から死ぬことの変容を把握する」ための素地が固まりつつある。この点は、今後の死の研究が取り組む沃野をさらに開拓していくものとして注目されて良いだろう。

V 結

以上のようにかなりの駆け足で、三つの領域の系譜を我々は俯瞰してきた。最後に本稿の目的に立ち戻り、これらの潮流の絡み合いの中から葬儀産業研究が持つ可能性を論じることとしよう。

まず人類学においては、死という出来事を死者儀礼の場に還元させようという試みが「民族誌を書く」という手法の中で継続されてきたが、多くの儀礼研究の根幹にある「儀礼には何か—心性、規範、教義など—が反映している」という論旨は、実は「その『何か』の説明はどう担保されるのか」という問題を孕むものであった。この問題を福島真人は以下のように述べている。

儀礼研究のパラドックスは、儀礼がその構成要素として、民俗知識を喚起するポテンシャルをもった諸事物を配列しているのに、その執行自体の公準が、慣習的行為としての細則の遵守というレベルにしか存在しないと

いう点に基づく。

[福島1993:139]

このことを言い換えるならば、「そうすることになっているので、そうする」という、儀礼実践の慣習のもしくは循環的性質を超えて解釈を与えようとした時点で、実は「どうとでも言える」ことの可能性以上の、単一の釈義を本質主義的に定めることは極めて困難になることがここでは主張されている。即ち儀礼とは「何々は云々をあらわしている」という知識を呼び起こすようなポテンシャルを持つ傾向を有する種々の要素（言語・行為・物品）から構成されている以上 [福島 1993:134]、誰が何を言っているのかという次元、そして何がどのようにあらわされているのかという次元が織り成す、二重の不確定性が存在するのだ。こうした問題提起でも明らかのように、従来の儀礼研究における分析上の瑕疵は、観察者が儀礼を事後的且つ作為的に解釈してしまうという行為に存在していたと言える。

こと儀礼を考えるにおいて、我々はこの論旨に最大限の注意を払う必要がある。しかし解釈を生産して行く社会的な圧力そのものに注目すると、問題はまた違った局面に踏み出す。つまり、「儀礼の意味を問うことは不可能である」という言明と、「儀礼の社会的文脈が縮減している」という言明とは明らかに等価ではないのだ。死という主題に戻ろう。葬儀産業の活動と種々の葬儀実践は、サービス化や商品化といった経路に乗る形で、死に対する特定の態度が演繹されたものと捉えることもできる。この理由提示だけでは上述した解釈一般化の瑕疵の批判を免れ得ないが、しかし現代の死者儀礼は共同体のイベントから変容を遂げ、カネを払って受け取る商品として存立するという新たな局面に突入している。こうした商業的な傾向を嫌うという反動も存在するが、いずれにしてもそこには能動的に「望ましい死」をつくりあげる一つの装置が存在すると言えるのではないか。この点で葬儀産業研究は「人が死ねば葬儀をする」という圧倒的傾向に執着しつつも、儀礼そのものからさらに広がる社会的圧力を解きほぐすこと、そして産業化のドライブという現代的特質に着目することで、ひとまずは本質主義的な解釈学から離れて、「死への態度」の集団的性向を生み出していく仕組みを探索するものと位置付けることが可能であろう。

一方で、デス・スタディーズが注目してきた「医療」・「臨床」・「死に近づく過程」・「死に直面する心理」といった側面への注目は、間違いなく現代社会

における「死の大きな部分」に肉薄しようという挑戦であった。そしてそこには、臨床空間に問題を限定することで、多くの人々が抱く要求に応えようという研究倫理が背景にある印象が強い。しかしその倫理は、時に「最も死に近い時空」に接近すること自体が、死に肉薄することであるという自負につながっているようにも思われるのだ。従って我々が見てきたように、デス・スタディーズでは「死に近い個人」の心理的な動態が主要な問題として掲げられることとなった。

ここで問題とされるべきは、死における実践や観念、あるいは態度といったものが、果たして「死に近い」時空のみで形成されているのかという点である。死を考究する上での最たる障壁は、それが常に錯綜の極みで発生しているという事実にある。人が死ぬこと自体は、人は皆死ぬという生物学的普遍性から逸脱することはないが、他方では人間の数だけ多様な死に様が存在する。またそこには、死ぬまで・死ぬとき・死んだらという時間的な区分の問題があり、さらに誰が死んでいるのかという問題、つまり一人称の死・二人称の死・三人称の死という区分をここに加えると、死を取り巻く問題は混迷を極める。死にまつわる問題に我々が取り組む時、学問領域によらずこうした錯綜をいかに克服していくかが最初の課題となるが、同時にこの錯綜こそが最も困難な課題でもある。この点でデス・スタディーズの潮流は、こうした錯綜に「対処すべきものとしての死」という一つの筋を通したものであった。だが、死という出来事に時間的・空間的に近いところで生起する「死への対処」もまた、そこからさらに広がる社会的な変化やサイクルに晒されているという点で、特権的な地位にはない。むしろ「死への対処」が極度に点的なものとして捉えられ、個々人が制御し得る限りでの分類学上の実践や心理しか問題にされなくなってしまうのであれば、それは彼なり彼女なりが様々に持つ「死への態度」を構成してきた社会的背景を無視した、機械的な処方提示に終始してしまうことになるだろう。しかしここでは「従来のデス・スタディーズの潮流がそうであった」ということを示したいのではない。逆に、対処=応用を目指した研究を支えるものとして、医療や終末期という時空からさらに広がる死の社会性を見つめる研究の充実が図られて良い、というのがここでの主張である。

まとめよう。本稿ではそうした死の社会性を捕捉しようとする手段の一つとして、葬儀産業研究という手法の可能性を、限定的ながら「死の研究」の

広がりの中で提示することを試みた。葬儀産業研究は、死に付帯して行われる最も幅広い実践としての死者儀礼に注目するという視点を儀礼研究から受け継ぎつつも、儀礼の場からさらに広がる社会的動因に着目して、そこに死への態度の集団的性向が顕現されてくる仕組みを分析しようとするものであるが、同時にそれは、従来のデス・スタディーズが進めてきたような実践知の探究を、ひとまず応用という見地からは離れて補完しようとするものでもある。勿論これは今まで述べてきたような領域だけに言及されることなく、死という出来事が様々な錯綜の中で存在し、遍在している以上、そこには従来の自然科学・社会科学・人文科学といった枠組みを超えて、相互に補完し合うという視座が、従来以上に求められるのは言うまでもない。この点で本稿は、例えば葬儀産業研究という聞き慣れない分野も、実は死という問題の前ではそれなりの意義があるということを強弁してみることで、より学際的な死への取り組みの必要性を強調するというテーマを裏側に抱えていたものでもあったのである。

追記

本稿は2002年12月に東京大学大学院総合文化研究科に提出された修士学位論文「資源化する死：現代日本の葬儀産業を事例として」の第2章に加筆修正を加えたものである。また本研究は、特定領域研究「資源人類学（略称）」（領域番号606）計画研究「文化資源の生成と利用」（14083201）、2003年度トヨタ財団研究助成、松下国際財団研究助成、及び渋澤民族学振興基金の成果の一部である。尚、本稿の作成に当たり、ラトローブ大学緩和ケアユニットの統括責任者であるAllan Kellehear教授と重ねた討論が大きな励ましとなった。記して謝意をあらわすこととしたい。

註

- 1) 1920年代から1970年代までの人類学の中で、死という問題を前面に掲げた代表例としては、Goodyの*Death, property and the ancestors* [Goody 1962]が挙げられる。この西アフリカのLodagaa族に焦点を当てた研究は、死者儀礼だけではなく、死を契機とした財産承継に着目することで、死という出来事が様々な社会慣習に溶け込んでいくという主張 [Goody 1962:416-435]を展開した。
- 2) 例としてHumphreyの“Rituals of death as a context for understanding

personal property in Socialist Mongolia” [Humphrey 2002]などがある。

- 3) 後にウィスコンシン大学に移管。名称もCenter for Death Education and Bioethicsに変更された。
- 4) 元々のタイトルは*Death Education*であったが、1984年に*Death Studies*に改題された。
- 5) この例としてはVernonの*Sociology of death* [Vernon 1970] が挙げられる。同書ではシンボリック相互作用論の援用を試みて、死にまつわる行動と概念は「個人・象徴・オーディエンス・状況」の相互作用によって生起し、変容し、関係付けられると主張した。
- 6) 米国以外ではまた異なる潮流が展開されていることにも留意したい。例えば英国では既に1965年に、Gorerの*Death, grief and mourning in contemporary Britain* [Gorer 1965] が出版されているが、ここでは当時のイギリス人の多くが、死別体験において「悲しみ」を意識的に拒絶することを是とするような社会的規範が産み出されているという点が示されている [Gorer 1965:126-131]。こうしたGorer流の分析は社会学と心理学が協同して死という研究対象に取り組むための素地を提供し、且つこの時期と相前後して英国で世界初の本格的ホスピスが設立されたものの、死への取り組みが米国と同じ程度と流儀で展開されるということではなかった。その点についてWalterは、英国において死の研究は医療研究という枠組みの中に閉じ込められてしまったと考察しているが [Walter 1993]、加えてそもそも研究者の絶対量が英国と米国では異なることも背景としてあるだろう。尚、日本における潮流については島藺進の「死生学試論（一）」における考察が参考となる。島藺が述べるように、いわゆる「死生学」あるいは「死の準備教育」に代表されるような、実践知的な傾向の強い研究が日本では主流となっている印象が強い [島藺 2003]。
- 7) 葬儀の請負や執行に関して中心的役割を担う葬儀社社員。日英と異なり、米国では公的資格を必要とする。

参考文献

- Bloch, M., 1989 *Ritual, history and power: selected papers in anthropology*, London: The Athlone Press.
- Bloch, M. and Parry, J.(eds.), 1982 *Death and the regeneration of life*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Bowman, L.E., 1959 *The American funeral: a study in guilt, extravagance and sublimity*, Washington: Public Affairs Press.

- Charmaz, K., 1980 *The social reality of death: death in contemporary America*, New York: Random House.
- Clark, D.(ed.), 1993 *The sociology of death: theory, culture, practice*, Oxford: Blackwell.
- Draznin, Y., 1976 *How to prepare for death: a practical guide*, New York: Hawthorn Books.
- Faunce, W.A. and Fulton, R.L., 1958 "The sociology of death: a neglected area of research", *Social Forces*, Vol.36, No.3.
- Feifel, H.(ed.), 1959 *The meaning of death*, New York: McGraw-Hill.
- 福島真人, 1993 「儀礼とその釈義：形式的行動の解釈と生成」、第一民俗芸能学会（編）、「課題としての民俗芸能研究」、ひつじ書房。
- Gebhart, J., 1928 *Funeral costs: what they average. are they too high? can they be reduced?*, New York: G.P. Putnam's Sons.
- Glaser, B.G. and Strauss, A.L., 1965 *Awareness of dying*, Chicago: Aldine.
- Goody, J., 1962 *Death, property and the ancestors: a study of the mortuary customs of the Lodagaa of West Africa*, Stanford: Stanford University Press.
- Gorer, G., 1965 *Death, grief, and mourning in contemporary Britain*, London: Cresset Press.
- Howarth, G., 1996 *Last rites: the work of the modern funeral director*, New York: Baywood Publishing Company.
- Howarth, G. and Jupp, P.C.(eds.), 1996 *Contemporary issues in the sociology of death, dying and disposal*, New York: St. Martin's Press.
- Humphrey, C., 2002 "Rituals of death as a context for understanding personal property in Socialist Mongolia", *The Journal of the Royal Anthropological Institute*, Vol.8, No.1.
- 石川弘義, 1990 「死の社会心理」、金子書房。
- Kastenbaum, R., 1959 "Time and death in adolescence", in H. Feifel(ed.), *The meaning of death*, New York: McGraw-Hill.
- Kastenbaum, R. and Aisenberg, R., 1976 *The psychology of death*, New York: Springer.
- Kearl, M.C., 1989 *Endings: a sociology of death and dying*, New York: Oxford University Press.
- Kephart, W.M., 1950 "Status after death", *American Sociological Review*, Vol.15, No.5.

- Kübler-Ross, E., 1969 *On death and dying*, New York: Macmillan.
- Lifton, R.J., 1971 *Death in life: the survivors of Hiroshima*, Middlesex: Penguin Books.
- 1976 *The life of the self: toward a new psychology*, New York: Basic Books.
- 1979 *The broken connection: on death and the continuity of life*, Washington: American Psychiatric Press.
- 松本由紀子, 1996 「現代日本の新しい葬法：『家の墓』意識と死後の自己決定の狭間で」、『社会学評論』、第186号。
- Metcalf, P. and Huntington, R., 1991(1979) *Celebrations of death: the anthropology of mortuary ritual(2nd ed.)*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Mitford, J., 1963 *The American way of death*, New York: Simon and Schuster.
- 村上興匡, 1997 「葬儀執行者の変遷と死の意味づけの変化」、伊藤唯真・藤井正雄（編）、『葬祭仏教：その歴史と現代的課題』、ノンブル社。
- Palgi, P. and Abramovitch, H., 1984 “Death: a cross-cultural perspective”, *Annual Review of Anthropology*, Vol. 13.
- Pine, V.R., 1975 *Caretaker of the dead: the American funeral director*, New York: Irvington Publishers.
- Seale, C., 1998 *Constructing death: the sociology of dying and bereavement*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 島蘭進, 2003 「死生学試論（一）」、『死生学研究』、2003年春号。
- Sudnow, D., 1967 *Passing on: the social organization of dying*, Englewood Cliffs: Prentice-Hall.
- Suzuki, H., 2000 *The price of death: the funeral industry in contemporary Japan*, Stanford: Stanford University Press.
- 2003 “McFunerals: the transition of Japanese funerary services”, *Asian Anthropology*, Vol.2.
- Turner, R.E. and Edgley, C., 1976 “Death as Theater: a dramaturgical analysis of the American funeral”, *Sociology and Social Research*, Vol.60, No.4.
- 内堀基光・山下晋司, 1986 『死の人類学』、弘文堂。
- Vernon, G.M., 1970 *Sociology of death: an analysis of death-related behavior*, New York: The Ronald Press.
- Walter, T., 1993 “Sociologists never die: British sociology and death”, in D. Clark(ed.), *The sociology of death : theory, culture, practice*, Oxford:

Blackwell.

Wilson, A.T. and Levy, H., 1938 *Burial reform and funeral costs*. Oxford:
Oxford University Press.

山田慎也, 1999 「葬祭業者を利用することとは」、新谷尚紀（編）、『講座 人間と環境 第9巻 死後の環境：他界への準備と墓』、昭和堂。

(たなか・だいすけ 東京大学大学院総合文科研究科博士課程)

Studying the Funeral Industry: Social Trends in Understanding Death

Daisuke Tanaka

This paper will trace the lineages of 1) anthropology, which has dealt at great length with the issue of death from the viewpoint of death rituals; 2) death studies, which focuses primarily on medical, clinical and psychological aspects of death within an interdisciplinary approach and 3) funeral industry studies, my current concern. I perform this tracing of lineages in order to describe the situation in current research on death. This work will demonstrate the value of studying activities in the funeral industry as important indicators of social trends concerning death that exist between the universality of a biological death and its social and individual expression. The funeral industry is the main organization tasked to manage funeral rituals. Yet the funeral industry itself is frequently overlooked in traditional research about death. The traditional emphasis has been on medical, clinical and psychological methods and studies primarily on dying and loss rather than the facts of death itself. This is ironic given that the social significance of the funeral management of post-death activities is as widespread and dominant as the medical management of pre-death (i.e. dying) activities. Any consideration of death and dying therefore ought to be at least a joint consideration, and yet rarely is.